

# —20年間の成果と今後の課題—



20年  
大きな節目

## 一 学会の発展を振り返る

**発表テーマ数  
95件**

6月28、29日の両日、東京都品川区のきゅりあん（品川区立総合区民会館）で、「品質工学の果たすべき役割を探る 20年間の成果と今後の課題」をテーマに学会創立20周年記念大会として研究発表大会が開催された。発表テーマ数は95件 参加者は731人。また同学会の創始者であった田口玄一博士が6月に死去し、同氏の遺志を継ぐ、新たなスタートを切る大会となった。

何時つぶれてもおかしくないと言われた品質工学会（発足時は品質工学フォーラム）が、20周年を迎えた。まさに、創始者の田口玄一博士の力で、あり、さらにそれを支えた多くの会員の成果でもある。

発足当初は品質工学に取り組むことが大きな勇気を必要とすることであった。それがいがないう大きな成果を生んで、多くの人が目を見張った。品質工学会のその後の発展はめざましく、次々と新しい成果を生んでき、また新しい成果を生んでき、このように発展を振り返り

返ってみると、かつて成績とみなされたものは、今はもう当たり前のことになってしまい、新しい成長の証であるが、これが刺激が少くなると何とか停滞しているように思われる。停滯と思えることがかからないほど大きな成果ではないと納得されないかも知れない。

## 目に見えない 効果の恐ろしさ

やればできることがたくさんあるのに

惜しくも6月2日、田口玄一博士が6年間の闘病生活の末に亡くなられた。我々の研究の多くが博士の考へに従いこままで来た。田口博士からはまだまだこの先があると言っていたのであるが、もう言葉聞くことができなくなってしまった。後を負うのはすべて我々である。新しい成果を示すことが必要ないものかもしれない。

## 秋の大会に向けて 新しい出発

品質工学を一言で言えば評価の學問である。あるいは、評価していることが本当の評価になっているのかを再度評価する。すなわち、「評価



志あるものが  
努力している

## 学会の地道な 活動として

い、大きな成果を挙げて動車、事務機分野の各企業は、品質工学を武器にいた。

一方で、退職後も自分が研究を継続し、研究を行った。さらに15周年の研究を行っている人たちも生まれている。ここに新しい人間像が生まれているのである。

# 第20回品質工学研究発表大会紙面報告

品質工学研究所 理事・名誉会員  
代表取締役

矢野 宏

い、大きな成果を挙げて動車、事務機分野の各企業は、品質工学を武器にいた。一方で、退職後も自分が研究を継続し、研究を行った。さらに15周年の研究を行っている人たちも生まれている。ここに新しい人間像が生まれているのである。

い、大きな成果を挙げて動車、事務機分野の各企業は、品質工学を武器にいた。

一方で、退職後も自分が研究を継続し、研究を行った。さらに15周年の研究を行っている人たちも生まれている。ここに新しい人間像が生まれているのである。

# 世界の明日を、エンジニアリング。

IHIは「ものづくり技術」を中心としたエンジニアリング力によって、環境、エネルギー、産業・社会基盤など広範な分野で、地球規模のテーマから暮らしの身近な課題まで貢献しています。

## IHIグループ5つの事業領域

- 【資源・エネルギー】○発電用ボイラ ○原子力機器 ○貯蔵プラント(LNG/LPG) ○ガスタービン発電設備 ○浮体式LNG設備など
- 【船舶・社会基盤・セキュリティ】○橋梁 ○交通システム ○バーキングシステム ○シールド掘進機 ○プロセス・医療プラント ○防衛機器 ○商船・艦艇など
- 【産業機械・システム】○物流システム ○運搬機械 ○製鉄機械 ○産業機械など
- 【回転・量産機械】○車両過給機 ○圧縮機 ○船用過給機 ○船用ディーゼルエンジン ○小型ディーゼルエンジン ○農業機械など
- 【航空・宇宙】○ジェットエンジン ○ロケットシステム

Explore the Engineering Edge

**IHI**

